

Ⅲ グループディスカッション

10 グループにわかれ、自由に話し合っていました。失語症会話パートナーとしての活動上の課題、今後の展開について、また家族としての思いなど、話題は多岐に及びました。出された意見の一部をテーマごとにまとめてご紹介します。

1. 現在の活動について

◇ 友の会や自主グループでの活動

- ・グループは当事者主体でと思うが、実際には難しい。
- ・10～20代の若い失語症の人への対応に戸惑う。
- ・独居の人や家族的な関わりが不足している人は自己肯定観が不足しがちの方が多い。友の会でも個別の時間にゆっくり話を聞き出す時間がとても重要だと感じている。
- ・失語症会員の高齢化により、活動していたグループがなくなってしまった。
- ・対象者の高齢化にともない、近くの喫茶店に行きたいなど、会話よりも生活の援助へのニーズが多くなってきた。
- ・歴史があるところは強いが、何も無いところから始めるのは難しい。



◇ STとの関係

- ・担当するSTが替わると会の形が変わり、対応に迷う。
- ・若いSTは会話パートナーの役割について理解が曖昧で、活動しづらいことがある。
- ・STのなかで会話パートナーの認知度はどの程度だろう。失語症の人の生活を想像したら必要だと分かるはずだが、重要視しているのかどうか、疑問に思うこともある。
- ・STや家族に、会話パートナーの活動の意味、必要性を知ってもらう必要があると思う。

◇ 失語症の人にとって私たちの存在は？

- ・失語症の人たちは、STと話がしたくて会に参加しており、会話パートナーを求めているように感じる。
- ・失語症の人たちに、自分たちの気持ちなんてわかるわけがないと言われた。
- ・私たちが力になれるか実感がない。
 - 場があるということ自体が大切なこと。
 - 失語症の人たちが満足しているのか、と常に考えることが大切。
 - 自己満足ではいけない。振り返ることを大切にしたい。
- ・会話パートナーに期待されることはなんだろう？どんなニーズがあるのかと考える。

- 生活のクオリティを高めることではないか。
- （会話パートナーの活動によって）失語症の人同士が繋がればいいのではないかと思う。

◇ その他

- ・活動には、経済的な負担（交通費の問題）も大きい。

2. 会話パートナーとしてのスキル

◇ 支援の難しさ

- ・板書は要点をまとめるのがとても難しい。
- ・会話のきっかけ、深まりをどう 作ればいいのか悩んでいる。
- ・生活の場面がいろいろあり、そういうところで必要とする手伝いが違うのも難しい。
- ・重度の失語症の人への支援が難しい。
 - 重度の失語症の人との会話でどうしてもわからない時もあり、申し訳ないが切り替るしかない。その時はわからなくてもある時わかることがあるので「考えておきますね」ということが大事だと思っている。
- ・1対1、友の会、外出などいろいろな形があり、それぞれ内容が違う。また、対象者の年齢、心理状態によってふみこめる範囲も違い、難しい。

◇ 会話パートナーのスキル

- ・会話パートナーとしてスキルがどれくらいあればいいのかわからない。
- ・活動上の悩みや技術の相談などは、他の人はどうしているんだろうと思う。
- ・スキルアップして、いずれはナースやヘルパーと同じような立場になれればいいと思う。
- ・スキル検定が必要ではないかと思う。
- ・講座終了後、現場で学ぶだけでなく、スキルアップの場がもっと欲しい。
- ・長く活動を続けてもらうためには、養成だけではなくフォローが必要だと思う。
- ・グループではなんとか対応できているが、個人宅の訪問などを考えると難しい。

3. 会話パートナー同士のつながり

- ・会話パートナーの横のつながりがほとんどない。
- ・活動が広い地域にまたがっており、会話パートナー同士集まるのが難しい。
- ・広範囲で活動していて集まりにくい。もっと密にコミュニケーションを取るにはどうしたらよいか。
 - 定例会や勉強会などで、横のつながりを作り知り合うことが大事。

- ・会話パートナーの例会に参加するメンバーが固定化している。
- ・会話パートナーの会員数が増え、まとめるのが大変。
- ・会話パートナーを継続して続けてもらうにはどうすればいいか。継続できているのは、仕事をやめた高齢者ばかり。継続できない原因は、時間がない、手ごたえが得られにくいなどのようだ。
 - こまめに ST と交流できる勉強会などがあるといいかもしれない。
 - 会話パートナー同士が顔をあわせる場が大事だと思う。

4. 家族として思うこと

- ・家族は日常を支えることで精一杯で、言葉のことにまで手が回らない。家族も理解し切れず諦めのムードが漂っている。
- ・夫が重度失語症になり、夫を理解するために会話パートナーになった。今後何ができるか模索中。
- ・会話パートナーの知識が、家族の介護に実際に役立つという経験をした。
- ・家族の介護があるため限られた活動しか出来ないが、人を支援して帰ってくると、家族にも優しくできる。
- ・家族も会話パートナーのように学ぶことが必要だと思う。
- ・友の会などでは、家族が参加することの意味も大きいと感じる。

5. 失語症を広く知ってもらう必要性

- ・行政への働き掛けに関して、他の高次脳機能障害に比べ「失語」は影が薄いようだ。
- ・「失語症会話パートナー」「失語症」を知らない人が多い。
- ・公の力を借りるためにはどうすべきか？当事者は「声」を出せない。
- ・ヘルパーなどへの失語症の教育が不足している。
- ・失語症の社会的認知がないと外に出にくい。個人派遣よりも会話パートナーが至るところにいる状況が理想。
- ・市に会話パートナー養成を陳情したが、市は失語症、会話パートナーともに知らなかった。
- ・もっとメディアに働きかけることも有効ではないかと思う。

6. 今後の活動の展開

◇個人宅派遣について

- ・友の会などに参加できる人はよいが、出てこられない人への対応が問題だと思う。
- ・個人宅へは、ボランティアでは行きづらい。ある程度身分がないと難しいと感じる。

- ・「話」だけでなく、リハビリ効果を期待されているようだ。
- ・個人宅派遣を行うことには限界があると感じる。
- ・個人宅の訪問では、家族構成や趣味のことなど話題が固定化してしまい、話すことがなくなってしまふ。
- ・1対1は最初は不安だったが、行ってみたらゆっくり話せてよかった。会話は相手がいないと出来ない。会話パートナーはその相手になっているのだと思う。
- ・個人宅訪問のときは、ナースやケアマネージャーに同行してもらっている。会話もみてもらえるので良い。
- ・個人派遣がこれから増えていくのではないかと思う。和音では、三ヶ月ごとにまとめを書いて和音に提出するので、困ったことを相談することができて安心。不安だったが、最初はSTと一緒に行ってくれた。

◇ 新たな活動先の開拓には

- ・失語症の人がどこにいるか分からない。民生委員も含め、誰も把握していないのが現状。
 - 回復期リハのSTが地域の自主グループを知っていると、当事者に紹介してくれる。
 - STやケアマネージャーから、退院する失語症の人に会話パートナーのことを伝えて欲しい。
- ・新たな活動先を開拓するために会話パートナーの知名度をあげていく必要があると思う。
 - インターネット上の情報提供だけでは高齢者には届かない。
 - ケアマネージャーの事業所、ST養成校などにアピールを！
 - テレビなどマスコミの力を借りることができれば大きな効果があるはず。
 - 市のボランティア登録をする。
 - STのいる障がい者センターに、失語症の人はいますか？と聞きに行くのはどうか。
 - 当事者や家族に会話パートナーの存在を知ってもらうために、行政の人にもっとPRして欲しい。
 - 会話パートナーのことについてのリーフレットを作りたい。

